

〈論文〉

メキシコ南東部キンタナロー州マヤ系村落の年間生活サイクルについて

—— エスノヒストリーの視点から ——

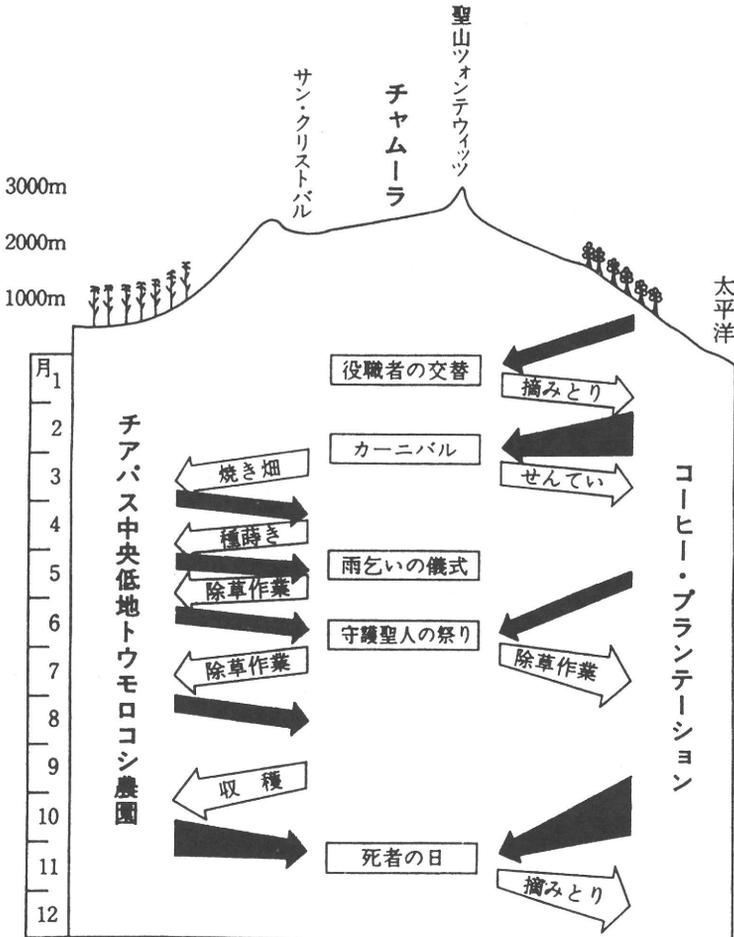
初谷 讓次 (天理大学)

はじめに

資本主義が、ある国もしくはある地域に侵入するとき、外国資本と民族資本の別を問わず、それがかならずしも共同体社会を破壊することなく、逆に共同体との接合に依拠しつつ発展していく場合がある。メキシコ最南に位置するチャパス州の、19世紀末以降のコーヒー・プランテーションの発展が、その典型的なケースであることは、清水透氏の研究において明らかにされている¹⁾。コーヒー生産は、11月から翌2月までの摘み取り期には大量の労働力を要するが、年間のうち残りの8か月間はさほど労働力を必要としない。したがって、コーヒー・プランテーションの経営にとって、常雇の定住労働者を多くかかえることはけっして有利なことではなく、むしろ摘み取り期にのみ大量の臨雇の季節労働者を導入したほうが合理的である。このようなプランテーション側の事情と、深刻な土地不足に悩みながらカルゴ・システムや祭りといった共同性を維持するための貨幣収入をえる必要に迫られていたチャパス高地のインディオ共同体側の要請が、結びつく形でインディオの出稼ぎ労働に依存するコーヒー農園が発展した。しかも、トウモロコシの焼き畑を中心とする生産活動と、カーニバル、サンタクルスの祭りおよび死者の日の祭りといった祭事などのインディオの

生活サイクルにぴったりあう形でコーヒー・プランテーションへの出稼ぎが組み込まれている。このコーヒー資本（ドイツ系）とともにチャパス州では、同時期にゴムやカカオのプランテーションも流入するが、発展しなかった。インディオ共同体の祭りや生産のサイクルにぴったりあったコーヒー農園のみが成長をつづけ、季節労働は今なおつづいているのである（図1参照）。

図1 チャパス州チャムラ村の年間生活サイクル



出典：清水 (1988), 88ページ。

ところで、筆者がエスノヒストリー研究の対象としているメキシコ南東部のユカタン半島のキンタナロー州のマヤ系インディオ村落について、その生産や祭りの生活サイクルはどのようになっているのか、また、商品経済の浸透や外国資本の侵入といった変化にたいしどのような対応をみせてきたのか、ということが当研究の基本的な問題関心となっている。このような観点から、89年と91年の2回にわたって同地域において現地調査をおこなった。89年は、キンタナロー州フェリペ・カリリョ・プエルト周辺の村落において、聞き取り調査を中心におこない、ささやかながらすでに結果を報告したが²⁾、2度目の91年の調査では、同地域に散在する小集落についての全般的なデータをえるためには、聞き取り調査だけでは限界があることがはっきりした。また、特定村落にかぎっても、他所者にたいする警戒心が非常に強く、祭りの日程を調査することはかならずしも容易ではない。2か月間という短期間に100を越える小規模な村落の生活サイクルを探るといった試み自体も無謀であった。

結局、祭りに欠かせないアルコール類の販売が許可制になっていることに唯一の突破口をみい出した。調査の結果、祭りそのものが許可制になっており、各村落が祭りを実施するには、郡庁に許可を申請し、いわゆる祭礼許可書(permiso de fiesta)を発行してもらう必要があり、その許可書の写しがフェリペ・カリリョ・プエルトの古文書館(Archivo Municipal de Felipe Carrillo Puerto)に残されていることがわかった。古文書館の責任者ニコラス・ヒメネス氏の全面的協力をえて、1946年から1989年までの祭礼許可書を資料として入手しえた。およそ4000枚のコピーを持ち帰り、コンピュータのデータベース機能を利用して集計・分析した結果、2804件の祭りのデータが有効であることが判明した。むろん、このデータは、45年にわたる同地域の村落の祭りのすべてを網羅しているわけではない。未整理の資料のやまのなかから祭礼許可書のみを選び出す作業が完璧であるはずはなく、見落とししたデータもあるだろう。また、すでに紛失してしまっている許可書もあるはずだ。しかし不完全とはいえ、幹線道路以外は未舗装の道路し

かないアクセスが困難な100以上の諸村落の祭りの長期的動向を知る唯一の貴重なデータであることは確かである。

祭礼許可書のフォーマットは、年によってかなりの違いがあるが、おおむね(1)村落名、(2)責任者名、(3)責任者の役職名、(4)祭りの日程、(5)祭りの種類・趣旨、(6)酒類の販売量などが記載されている。本稿は、このデータの分析をもとに、同地域のマヤ系村落の生活サイクルを探り出したうえで、1917年以降この地域で発展したチクレ（チューイングガムの原料で、日本では一般に英語読みのチクルと呼ばれているが、ここではスペイン語読みのチクレを使用する）採集産業との関連について若干の考察を加えることを目的としている。したがって、本稿は祭りの内容についての人類学的調査報告（民族誌）ではなく、あくまでエスノヒストリー（あるエスニック集団の歴史研究）として位置づけられるべきものであることをあらかじめお断りしておきたい。

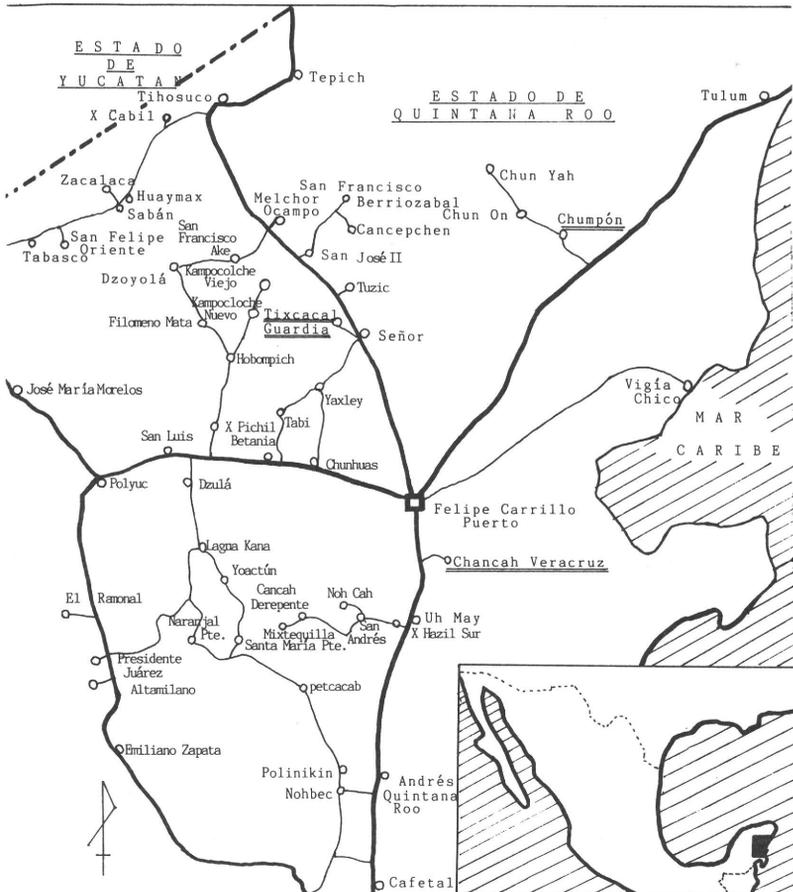
1 3つの祭記センター

(1) クルソブ集団小史

さて、データの紹介と分析に入るまえに、この地域のインディオ集団の歴史について簡単に触れておく必要があるだろう³⁾。1847年、セシリオ・チという指導者に率いられたインディオ反乱軍は、テピチ村を襲撃し、非インディオ住民を皆殺しにした。その後、反乱はユカタン半島全域にひろがり、翌年5月には半島の3分の2がインディオ反乱軍に制圧された。やがて、政府軍も必死に反撃し、1853年には反乱は一応鎮静化したが、半島東部の森林地帯に逃れた一部のインディオ集団は、その後も執拗にゲリラ闘争をつづけ、その拠点となったチャン・サンタ・クルスが最終的にメキシコ連邦政府軍に制圧されるのは、1901年のことであった。一般にカスタ戦争の名で知られるこの反乱は、8万人ものインディオをまきこみ、最初の3年間に15万人もの戦死者を出したメキシコ史上最大のインディオ反乱となった。

現在のキンタナロー州のフェリペ・カリリョ・プエルトは、じつはその反乱の拠点チャン・サンタ・クルスであり、その周辺村落に居住するマヤ系インディオは、クルソプと呼ばれ、最後までゲリラ闘争をつづけたインディオ集団の末裔にほかならない。1850年以降クルソプ集団は、ものいう十字架（十字架が神託を伝える）信仰と教会護衛システムを軸に、聖都チャン・サンタ・クルスを拠点に独自の共同体社会を形成したが、今世紀に

図2 キンタナロー州フェリペ・カリリョ・プエルト郡



入り、政府軍に鎮圧されてからは、2度にわたる分裂をへて、1930年代以降は、ティシュカカル・グアルディア、チャンカー・ベラクルスおよびチュンポンの3か村を祭祀センターとするゆるやかな3つの集団を形成している（図2参照）。

(2) 祭りの費用について

これらの3つの祭祀センターでは定期的には大祭がおこなわれ、その集団に属する村から人びとが集まるというシステムになっている。祭りのさいに、人びとに振る舞われる料理の材料はそれぞれの村からもち寄られる。それ以外の費用については、1991年4月におこなわれたチャンカー・ベラクルス村の聖十字架祭の例を具体的にみておこう。祭りの大きな出費はつぎの3項目である。

- ①バイオリンと大小の太鼓でマヤの伝統的音楽を演奏する、マヤ・パシユと呼ばれる3名程度の楽隊の費用=60万ペソ
- ②ダンス・パーティーのためのトロピカル音楽の楽隊の費用=1100万ペソ
- ③周辺村落への送迎バスの費用=700万ペソ

つまり、総計で1860万ペソになり、当時のレート（1ドル=3000ペソ=140円）で計算すると、日本円にして総額87万円になる。この高額な祭りの費用はどのようにまかなわれるのであろうか。結論からいえば、祭り期間中のビールの売り上げによってまかなわれるのが一般的である。ビールは、91年の情報によると1本700ペソで仕入れ、祭りでは2000ペソで販売される。つまり、1本あたり1400ペソの利益が出ることになる。たとえば、1990年8月のティシュカカル・グアルディア村における祭りにおいて、270カートのビールの販売許可が出ているので、1カートン24本で計算すると、総計907万2000ペソ（42万3360円）の利益となり、それが祭りの費用にあてられるはずである。そして、祭礼組織委員会（comité organizador de fiesta）のメンバーがビールの販売許可を含む例の祭礼許可書を申請し、ビールの売り上げと祭りの費用を管理するというシステムになっている。ただし、

たとえば詳しく聞き取り調査を実施できたチャンカー・ベラクルス村では、ビール販売による売り上げで祭りの費用をまかなうという点は同じであるが、少しやり方が違う。外灯委員会委員長(presidente del comité de alambres públicos)と呼ばれる役職につく人物が祭りの費用をすべて支払う。じつはこの役職者は、村でただひとりビールの販売権を村人と郡庁から正式に認められており、その売り上げで、村の外灯の電気代と電球代を負担し、祭りのさいには祭りの費用もすべて負担する。現職者のロベルト・ウク氏によると、ビールの売り上げと外灯や祭りの費用は、ほぼつり合っているとのことである。

(3) 祭祀センターにおける祭りの種類・日程について

(a) ティシュカカル・グアルディア村

それでは、この3つの祭祀センターのうちまずティシュカカル・グアルディア村についてみてみよう。祭りのデータは、1951年から89年までの39年間に計97件残されている。それを月別(ただし祭りの開始日)にみると、4月の35件、12月の23件そして8月の12件という順番で多くの祭りが記録されていることがわかる。まず、4月にかんしては、ビリャ・ロハスなどの民族誌に記録されているように⁴⁾、5月3日の聖十字架の日の祭りであることは間違いない。データによると、4月26日もしくは27日から聖十字架の日の5月3日までの7日もしくは8日間に聖十字架祭が実施されている。そして年度別にみると、この大祭は、61, 63, 65, 67, 69, 71, 73, 75, 77, 79, 83, 85, 87および89年の記録が残されており、明らかに2年に1度の割で奇数年におこなわれていることがわかる。なお、81年については祭りがおこなわれなかったのか、データの欠如なのかは不明である。

ついで、12月について詳しくみてみると、やはり民族誌の記録どおり8日の聖母マリアの日をはさむ形で約1週間の日程で、無原罪の御宿りマリア祭(Fiesta de la Virgen de la Concepción)がおこなわれている。年度別にみると、53, 69, 75, 79, 81, 83および89年の記録が残されている。データとしては不完全であるが、おそらく聖十字架の祭りと同じ年、つま

り2年に1度の割で奇数年に実施されてきていると考えていいだろう。

最後に8月についてみると、下旬の20日すぎからおよそ1週間の日程で、大きな祭りがおこなわれている。残念ながら、データには祭りの種類についての記録がない。年度別にみると、58, 70, 74, 78, 80, 82, 86 および88年の記録が残されている。やはり、不十分なデータといわざるをえないが、偶数年におこなわれていることは確かである。つまり、奇数年の4月と12月、偶数年の8月に大祭がおこなわれていることになり、8か月に1度祭りが巡ってくるという、桜井三枝子氏の聞き取り調査の結果ともみごとに一致している⁵⁾。

さらに、12月についてももう少しみてみると、72, 74, 78, 79, 80および81年の12月23・24日にキリスト降誕祭(Fiesta Navideña)がおこなわれており、8月に年に1度だけの大祭をおこなう偶数年におもに降誕祭が実施される傾向にあるのか、それとも、78年以降は毎年おこなわれているので、近年になって盛んにおこなわれるようになったかは、データ不足で判断できない。ただし、あとで詳しく分析するが、酒類の販売量についていえば、降誕祭では平均ビール600本の販売許可しかでていないので、ティシュカカル・グアルディア村だけでおこなう小規模な祭りにすぎないと考えられる。

(b) チャンカー・ベラクルス村

ついで、チャンカー・ベラクルス村については、1949年から89年にかけて計32件のデータが残されている。まず月別にみると、4月が18件と一番多く、ついで5月と3月がともに6件ずつ、そして2月に2件あるだけで、他の月は皆無である。さいわいチャンカー・ベラクルス村については、聞き取り調査をする機会があったので、それによると2年に1度の割で4月末から5月初頭にかけて聖十字架祭がおこなわれるということである。データによると、年度別については49, 51, 53, 55, 57, 61, 71, 75, 77, 81, 83, 85, 87および89年に祭りがおこなわれており、現地調査した89年と91年には祭りをおこなったと聞いているので、不完全なデータなが

ら奇数年に大祭を実施するという事は間違いないであろう。しかし日付については、ばらつきがみられる。一番早いもので4月1日から8日までの8日間の日程、一番遅いものは、5月16日から21日までの6日間の日程でおこなわれており、4月中旬に1週間程度というのが一般的のようだ。

(c) チュンポン村

最後に、チュンポン村についてであるが、1945年から89年にかけて計50件のデータが残されている。月別にみると、5月が一番多く39件、ついで4月に5件で、あとは1月、2月、6月、10月、11月および12月にそれぞれ1件が記録されているだけである。したがって、やはり5月に注目してみると、5月1日からおよそ1週間の日程で、3十字架祭(Fiesta de Tres Cruces)がおこなわれている。年度別にみても、1969年のデータには2年に1度の祭り(fiesta tradicional de cada 2 años)という記述がみられ、また1975年のデータには毎年祭り(fiesta anual)という記述がみられる。そしてデータを詳しくみると、確かに1945年から69年まではほぼ2年に1度の割合で奇数年に十字架祭がおこなわれており、1970年以降はほぼ毎年実施されていることがわかる。

以上、3つの祭祀センターにおける祭りのデータをみてきたが、整理するとつぎのように結論できる。つまり、3か村とも日程や頻度(毎年か2年ごとか)は異なるが、聖十字架祭を実施している。そして、あとで紹介する祭祀センター以外の諸村落と比較するとよくわかるが、3つの祭祀センターでは1年間に大祭以外の祭りをほとんどおこなわないということがわかる。大祭に全精力をそそぎ込んでいる格好になっている。また、もともと閉鎖的でクルソプ時代の伝統を維持しているといわれるティシユカカル・グアルディア村では、8か月に1度の割合で、つまり4月、12月および8月に大祭をおこなっている。これらの諸特徴は、のちに生活サイクルとの関係で重要になってくるので留意しておきたい。

2 全村落についてのデータ分析

(1) 過去47年間の推移

古文書館にて入手しえた2804件の祭礼許可書に記載されている村落数は、合計154か村にもものぼる。その他、郡庁によって作成された村落人口統計に記されている村落を合計すると、そのかずは300近くにもなる。ただし、この数字は新しく開墾されたばかりの人口わずか数人という土地(colonia)も含んでいるし、47年間にさかんに廃合されたり、村の名前が変わったりしているので、実際の村落数はこれほど多くはない。たとえば、1990年の人口センサスでは、人口12名の最小のセノテ・アスル村から人口3453名の最大のチュンウウブ村まで合計110か村が記録されているにすぎない。ここで、すべての村落名とその祭りの件数をあげるスペースはとてもないので、この地域のおもな村落名が入っている地図を掲載しておくにとどめる。

それでは、まず祭りの件数の推移を示す図3をみてみよう。祭りの件数は、1940年代にはすべて10件以下であったが、50年代に入るとおよそ30件に増え、その後順調に増加していき、79年以降はおおむね100件を越えている。ついで、フェリペ・カリリョ・プエルト郡の人口の推移を示した図4をみてみよう。やはり、順調に増加しており、かなりおおざっぱないい方だが両者には相関関係が認められる。つまり、人口増加は村落規模の増大とともに村落数そのものの増加も伴っており、それとともに祭りの件数も増加していくという、いわば自然な結果がえられた。

つぎに、祭りにおけるビールの販売量の推移を示した図5をみてみよう。やはり、年を追って増加しているが、40年代のデータがないのと70年代に落ち込みがみられるのは、データの不完全さが原因である。つまり、許可書のなかのビール販売許可の項目に販売量の記録がないタイプの書式があるためである。したがって、祭りの件数の増加にしたがって当然ビールの販売量が増加してきていると理解していただろう。つぎに、祭り1件あたりのビールの消費量の平均を年度ごとに示した図6をみてみたい。72年の

図3 フェリペ・カリリョ・プエルト郡における祭りの件数 (1943~89年)

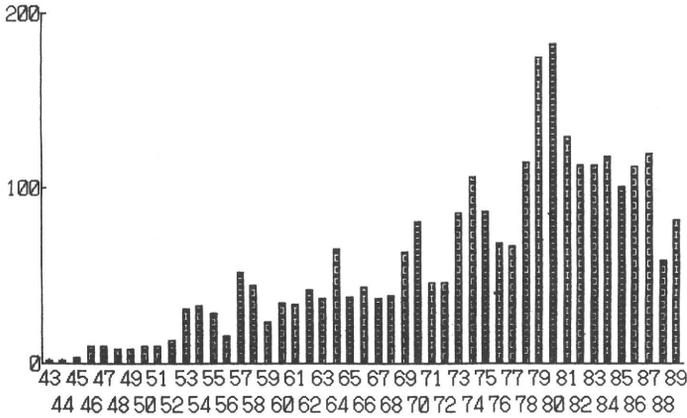
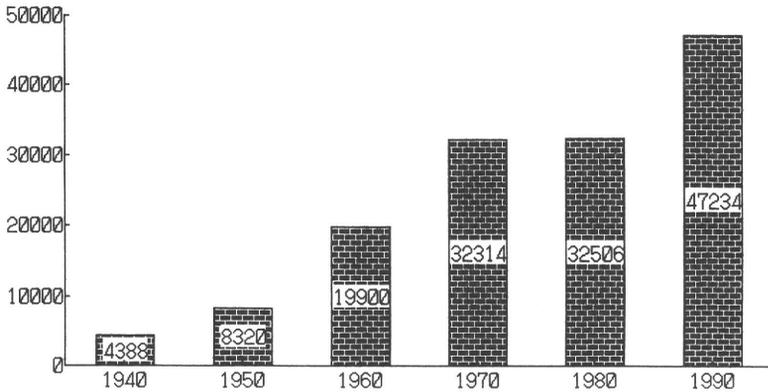


図4 フェリペ・カリリョ・プエルト郡の人口推移 (1940~90年)



出典：Cesar Darchary y Arnaiz Burne. pp247-249 y Instituto Nacional de Estadística, Geografía Informática. tomo 2, pp.1-2.

突出を除いて、ほぼ変化していないことがわかる。ちなみに、72年のデータはビールの販売量が記録された許可書が1枚しか存在しなかったため、大規模な祭り1件のみの数字になっているためである。ビール販売量が記載されている祭礼許可書は、1954年から89年までの1559件でビールの販売総本数は268万2384本である。したがって、祭り1件あたりの平均は1721本である。そこで、ふたたび図6をみて確認しておくと、1954年から89年までの36年間について、祭り1件あたりのビール消費量の年度別平均はほとんど横ばい状態がつづいている。ビールは、祭りの参加者が消費するわけであり、またその売上げが祭りの費用にあてられることからすれば、この数字は祭りの規模がほとんど変化していないことを示している。

(2) 月別データ

つぎに、生活サイクルと深くかかわってくる月別の分析に移りたい。まず、祭りの件数を月別に示した図7をみてみよう。スペースを節約するために、規模別の数字を積み上げたグラフになっているが、まず月別件数の総計からみてみると、12月から翌年6月までの期間が比較的多く、7月から11月までが比較的少ないという傾向が読みとれる。

さてここで、この地域の特徴をきわだたせるために、メキシコ全体の年間の祭りの月別件数を示した図8をみてみよう。このグラフは、メキシコ文部省が作成した全国の祭りの日付一覧にもとづいて作成したものである⁶⁾。同データは、たとえば本稿で扱っているキンタナロー州フェリペ・カリリョ・プエルト郡についていえば、6か村が記載されているだけであり、大きな村にかざられたデータではあるが、祭りの日付にかんするメキシコ全国規模の唯一の貴重な資料であることにはかわりない。これをみると、12月に祭りの件数が多く、2・3月が少ないという傾向がみられるが、そのほかの月はほぼまんべんなく祭りがおこなわれていることがわかり、7月から11月までが比較的少ないという、先のフェリペ・カリリョ・プエルト郡の傾向は、この地域独特のものであることがはっきりする。

つぎに、規模別にみてみよう。ここでは大規模な祭りとは、ビールの販

図5 フェリペ・カリリョ・プエルト郡における祭りのビールの消費本数
(1954~89年)

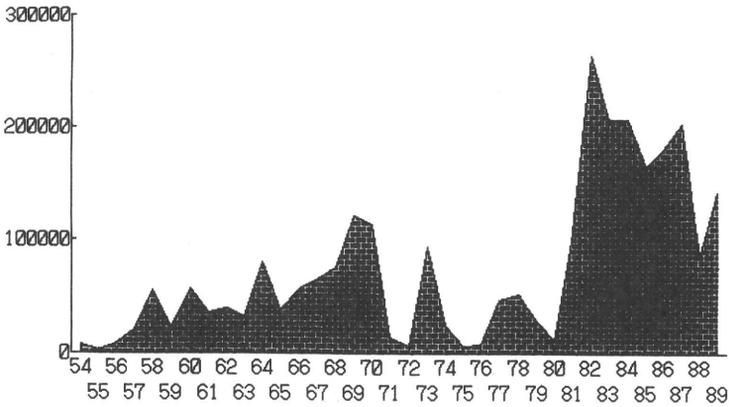
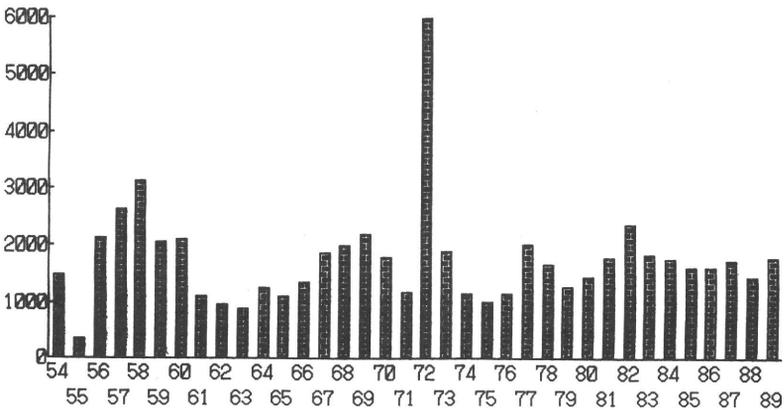


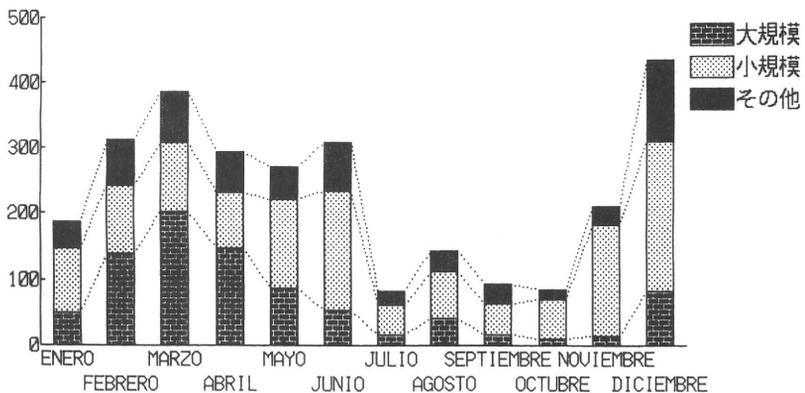
図6 フェリペ・カリリョ・プエルト郡における祭り
1件あたりのビールの平均消費本数 (1954~89年)



売が100カートン（2400本）以上の祭り（ただし期間が1日のものを除いた）と期間が3日以上のものでした。また、小規模な祭りとは、期間が1日のみでかつビールの消費が100カートン未満のものでした。先にみた傾向がさらにはっきりしてくる。まず、大規模な祭りをみると、7月から11月までの落ち込みがさらにはっきりとあらわれる。そして、小規模な祭りに着目すると、月による件数の変化がほとんどみられない。つまり、小規模な祭りは、12月が突出しているだけでその他は顕著な差はみられない。

さらに、月別に祭りの期間の平均を示した図9をみてみよう。祭り期間の全平均は、2.42日である。2月から5月にかけて日数という点では、大きな祭りが集中していることがわかる。つぎに、祭り1件あたりのビールの消費量の平均を月別に示した図10をみてみよう。全平均は1721本であるから、2月から4月そして8月に祭りの規模が大きいことがわかる。ただし月別データは、すべて祭り開始日をもとにしているのだから4月から5月にかけておこなわれる聖十字架祭は4月のデータに入るわけである。整理してみると、小規模な祭りは年間を通じて月別にかかわらず平均しておこなわれているが、7月から11月（8月は例外かもしれない）まで

図7 フェリベ・カリリヨ・プエルト郡における月別祭りの件数（規模別）



は大きな祭りはほとんどおこなわれていないことがわかる。

(3) 祭りの種類・趣旨について

それぞれの祭りの種類もしくは趣旨を特定しうるデータは、豊かではない。たとえば、伝統的祭り (fiesta tradicional), 世俗的・宗教的祭り (fiesta profana religiosa), ダンス・パーティ (un baile) あるいはたんに祭り (fiesta) というような記述がみられ、多くの許可書は祭りの種類を特定できない。しかし、祭りの日付などからの類推などの方法で、なんとかおおざっぱな傾向をつかんでみたい。

1月は、6日の主顕節つまり3賢人の日 (el día de los Santos Reyes) の祭りがめだっている。そして、2月と3月は圧倒的にカーニバルの祭りが多い。4月と5月は、聖十字架祭がめだつ。8月は、15日の聖母昇天祭がめだつ。そして12月は、8日の無原罪の御宿りマリア祭とキリスト降誕祭がめだつ。村の守護聖人 (Santo) 祭についてはほとんど不明だが⁷⁾、少なくとも以上がこの地域のメインな祭りであるといえる。先にみた月別のデータと合わせるとこの地域の1年間の大きな祭りのサイクルがほぼ明らかになる。そして、6月、7月、9月、10月および11月は、9月16日の独立記

図8 メキシコにおける月別祭りの件数

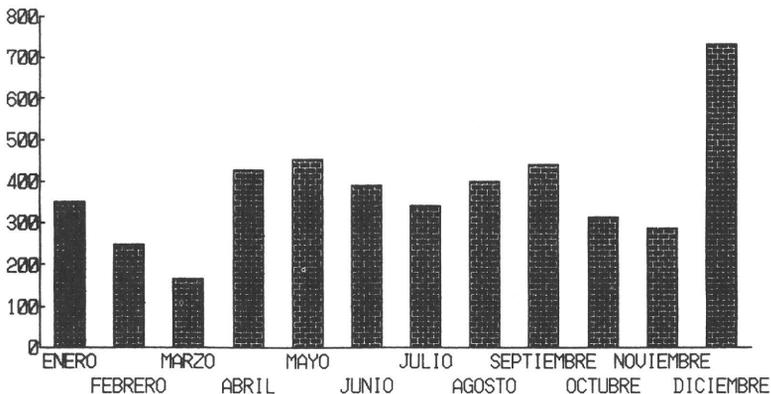
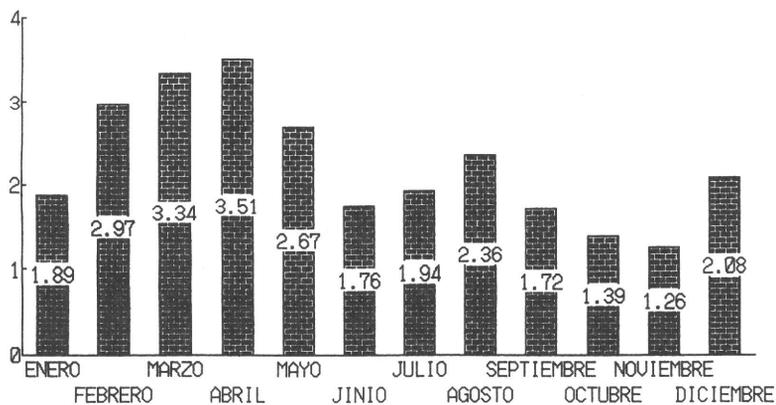
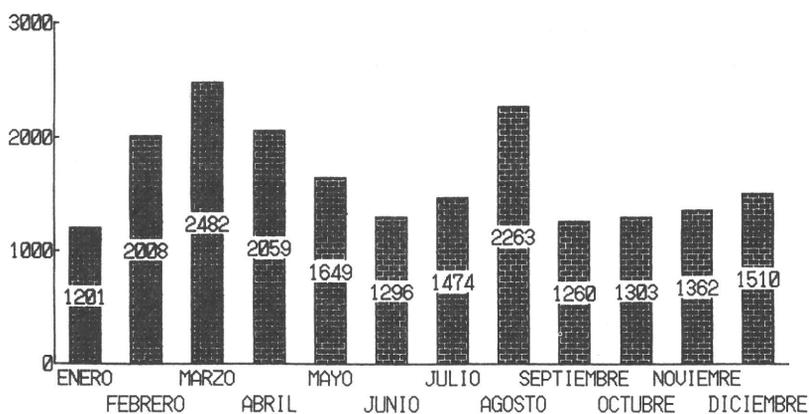


図9 フェリペ・カリリヨ・プエルト郡における月別祭りの平均日数

図10 フェリペ・カリリヨ・プエルト郡における
月別祭り1件あたりのビールの平均消費本数

念日の祝祭(fiestas patrias)がめだつ以外は、これといった祭りはみあたらない。これらの月は、先にみた月別データでも祭りの件数が少ないうえに小規模であるという結果がでていた。これらの月では、日本の例でいえば幼稚園のバザーのように、なんらかの施設充実のための資金集めを主たる目的とした祭りがめだつ。この種の祭りでめだつのは、学校の父母会(sociedad de padres de familia)または学校が主催するダンス・パーティーと村のスポーツ推進委員会(comité deportivo)がグラウンド建設・整備や道具購入のための資金集めを目的とした祭りである。その他、村の電化推進委員会(comité de pro-electrificación)、飲料水タンクの設備推進委員会(comité de agua potable)および村の道徳・公德・設備改善委員会(junta de mejoramiento moral, cívico y material)などが、やはり資金集めにおこなう祭りもめだつ。もちろん、この種の祭りは大祭がおこなわれる月にもみられ年間を通じておこなわれる。

最後に、チャパス州のマヤ系インディオのあいだでは盛んにおこなわれる11月1～2日の死者の日の祭りがなくとも特徴としてあげておこう。

3 生活サイクルにかんする考察

——祭りと焼き畑とチクレ採集——

(1) トウモロコシの焼き畑生産

この地域のというよりユカタン半島のマヤ系の人びとの主要な食糧生産は、征服以前から今日まで一貫してトウモロコシである。そして、その栽培方法は伝統的な焼き畑式である。一般にミルパと呼ばれるトウモロコシの焼き畑の作業手順をごくおおざっぱにみておこう。まず、2・3月に焼き畑のために雑木を伐採する。そして、雨期がはじまるまへの4月に焼き畑をおこなう。そして、5月に播種をおこなう。6月、7月および8月は一般にチャペオと呼ばれる除草作業をおこなう。そして、9月には収穫である。カスタ戦争のさい、インディオ反乱軍が、半島の3分の2を制圧し、州都メリダに迫っていた1848年の5月、突如退去しはじめたのが、トウモ

ロコシの播種のためであったことは有名である。

先の祭りとの関係で整理すると、無原罪の御宿りマリア祭→キリスト降誕祭→主賢節の祭り→カーニバル→雑木伐採→焼き畑→聖十字架祭→播種→除草→聖母昇天祭→収穫、というぐあいに12月から翌9月までの生活サイクルが浮かび上がってくる⁸⁾。

(2) チクレ採集

マヤ系の人びとは先スペイン期から、チコ・サポテ（サポジラ）と呼ばれる木の樹液（チクレ）を噛む習慣があった。チクレを噛むことで唾液が分泌され、喉の乾きを軽減したり、精神を集中したり、逆にリラックスしたり、また歯みがき効果もある。このチクレをチューインガムとして普及させたのは、米国人である。歴史的には、チコ・サポテの木が豊富なベラクルス州出身のカウディリヨであり、のべ11回メキシコ大統領の座についたアントニオ・ロペス・デ・サンタ・アナは、チクレを噛む習慣をもっており、1836年にテキサスとの戦争（サン・ハシントの戦い）で捕虜になり、翌37年にワシントンに送られたさいに、ジェームズ・アダムスという大佐の管理下に置かれた。アダムスは、サンタ・アナが噛んでいるチクレに関心を示した。なんらかの甘味料を加えれば、商品化できると考え、資本金50ドルで、アダムス・チューインガム会社を設立した。こうして、今日では世界中で噛まれているガムが生まれたが、広く普及するのは今世紀に入ってからのものである。今世紀にガム産業が米国において急速に発展するのは、第1次世界大戦のさい国防省が兵士の携帯食料のひとつにガムを加えたためである。兵士たちは、大量のガムを消費するとともに、ガムを噛む習慣を米国に普及させる役割を果たした。そして、第2次世界大戦においては、国防省はチクレを戦略物資と位置づけたほどで、年間60億個(pastillas)のガムが消費された⁹⁾。

先ののべたようにチューインガムの原料となるチクレは、チコ・サポテという木の樹液であるが、この木はメキシコの熱帯雨林に多くみられ、とくにユカタン半島（ユカタン州、カンペチェ州およびキンタナロー州）に

において良質のチクレが採集される。メキシコにおけるチクレ産業全般については別の機会に譲ることにして、ここではキンタナロー州（ただし1974年までは連邦直轄領）に限定して話をすすめたい。米国でガムが急速に普及し、原料のチクレの需要が高まる1910年代において、キンタナロー州の熱帯雨林地帯では、クルソブ集団が外部世界と接触を断ち、閉鎖的な生活を営んでいた。1918年、ベヌスティアノ・カランサ大統領は、そのクルソブ集団の指導者のひとりであるフランシスコ・マイをメキシコ市に招いて、将軍の称号を与えるとともに、キンタナロー州の2万ヘクタールの土地の開発権と当時フェリペ・カリリョ・プエルト（当時はサンタ・クルス・デ・ブラボと呼ばれていた）からピヒア・チコ港までの鉄道路線の使用権を譲渡した。これを契機に、キンタナローにおいてチクレの本格的な開発がはじまった¹⁰⁾。マイは、配下のものを使ってチクレの採集をおこない、米国やメキシコ会社と契約してチクレの販売を独占した。その後、1929年の世界恐慌によるチクレ価格の暴落をきっかけに失脚するまで、マイはチクレ王国に君臨した¹¹⁾。

さて、マイをメキシコ市に招き将軍の称号を与えたカランサ大統領の行為は、インディオ社会を国家に取り込むための仲介者（村ボス）の育成といういわば常套手段である。しかしながら、チクレ採集産業を受け入れた、マイおよびクルソブ社会は、まったく国家もしくは資本に利用され、翻弄されるだけの、いわば歴史の客体としてのみ理解してよいのであろうか。むろん、そのような見方もできないことはない。じっさい、マイの失脚後は、とくにカルデナス大統領がキンタナローを訪問した1939年以降、クルソブ集団はチクレ協同組合(cooperativa chiclera)およびそれらを統括するチクレ協同組合連合(Federación de Cooperativas)をつうじて、上から組織化され、国家に統合されていく。またそれとともに、各チクレ協同組合を構成するひとつの村もしくは数か村を単位にして、エヒード¹²⁾が設置され、村落は上から再編されていった（表1および図11参照）。そして現在も、チクレや木材などの森林資源の開発は各エヒードが協同組合形式でお

表1 フェリペ・カリリヨ・プエルト郡のエヒード一覧

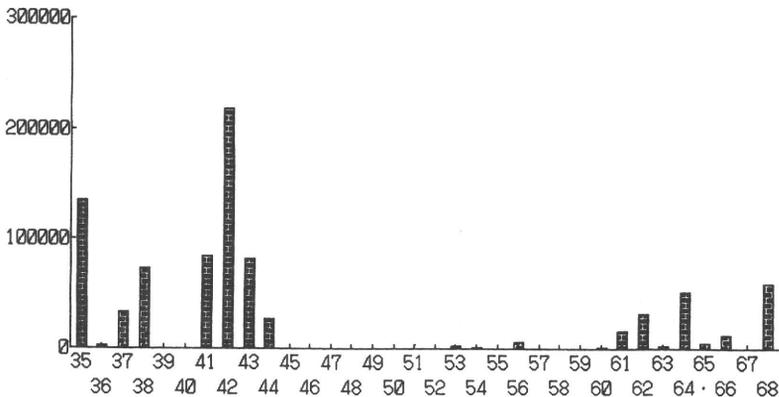
エヒード名	設置年月日	面積 (ヘクタール)	エヒダタリオ数	備考
Adolfo López Máteos	640809	3600	71	
Benito Juárez	620920	1040	24	
Bernardino Cen	661109	3500	68	
Bulukax	620112	1205	26	
Bulukax	661014	2550	50	追加
Cafetal Grande	610217	3265	50	
Candelaria	620112	4150	81	
Chan Santa Cruz	560725	1620	29	
Chan Santa Cruz	680508	4920	35	追加
Chunhuhub	640516	14330	235	
Chunhuas y Anexos	420325	59220	224	
Chunyaxché	350626	40000	235	
Chunyaxché	411203	64115	265	追加
Dos Aguadas	640819	5740	81	
Dziuche	360722	2125	245*	
Dziuche	440503	26855	-	追加
Dzula y Anexos	420225	29400	108	
Emiliano Zapata	661109	1450	27	
El Martirio	650914	2550	24	
El Naranjal	610217	2145	52	
Felipe Carrillo Puerto	411203	20001	55	
Felipe Carrillo Puerto	420218	27039	56	追加
Filomeno Mata	371027	8820	30	
Gavilanes	620920	1350	27	
Ichmul	370414	3840	69	
Kampocolché	610315	1025	24	
Kankabchén	560625	2495	118	
Kantemoc	530110	575	23	
Kilómetro 50	640506	10550	269	
La Ceibita	660715	990	46	
La Pimienta	640819	1150	21	
La Presumida	610117	3465	85	
Lázaro Cárdenas	621220	6550	51	
Nohbec	370414	18480	88*	
Nohbec	420121	4620	-	追加
Pedro Moreno	620920	1926	55	
Petcacab	351001	41222	137	
Petcacab	420415	13160	-	追加
Polyuc	560725	1670	146*	
Polyuc	620926	3315	-	追加
Puerto Arturo	640819	2520	40	
Ramonal	631111	1900	31	
Saban	370609	2800	36	
San Antonio Tuk	611027	2265	45	
San Arturo	661014	2600	50	
San Cristóbal	661014	1350	25	
San Felipe	540519	1205	58	
San Felipe Segundo	620112	2250	42	
San Felipe Oriente	620112	2250	39	
San Marcos	531020	1775	34	
San Ramón	651022	3350	55	
Santa Gertrudis	560725	885	42	
Santa Elena	430331	15230	-	
Siete Gatos	621220	2950	52	
Tabasco	620112	3000	58	
Tabi	610616	1185	28	

Tepich	350910	1344	55	
Tihosuco	430317	54600	128	
Tixcacal Guardia	620920	1750	33	
X Cabil	431215	11760	61	
X Hazil y Anexos	351217	52367	175 *	
X Hazil y Anexos	420304	23653	-	追加
X Maben	380318	73400	198	
X Nohcruz	640819	6410	105	
X Pichil	420121	27300	65	
X Yatil	420214	17200	93 *	
X Yatil	640516	2750	-	追加
Yaxley	611027	2505	61	
Yoactún	420211	16800	39	
Zaczuquil	601206	4825	80	
Nuevo Israel	680507	3040	29	
Presidente Juárez	680507	4640	45	
Dzoyola	680517	3040	29	
Kopchéh	680517	6300	62	
Nohcah	680506	2140	20	
Sabán San Francisco	680506	3040	29	
San Francisco Ake	680517	3540	34	
San José	680517	21400	213	
Xkalakdzonot	680506	7600	75	
Cafetalito	640125	1160	28	
Santa Gertrudis	640121	2600	64	追加
Chancah Derrepente	640310	1750	42	

* : 追加分を含めた数字

出典 : 'Relación de los ejidos del Territorio de Quintana Roo con los datos de la superficie concedida por resoluciones presidenciales o mandamiento de gobernador y el número de campesinos reconocidos como ejidatarios en cada poblado. Chetumal, 1968.' en Archivo Municipal de Felipe Carrillo Puerto.

図11 フェリペ・カリリヨ・プエルト郡における年別エヒード譲渡面積 (1935~68年, 単位:ヘクタール)



こなっている。このように、革命政権側からすれば、チクレ採集産業は、辺境地域を経済的・政治的に国家に統合していく有効な手段として機能したことは確かである。

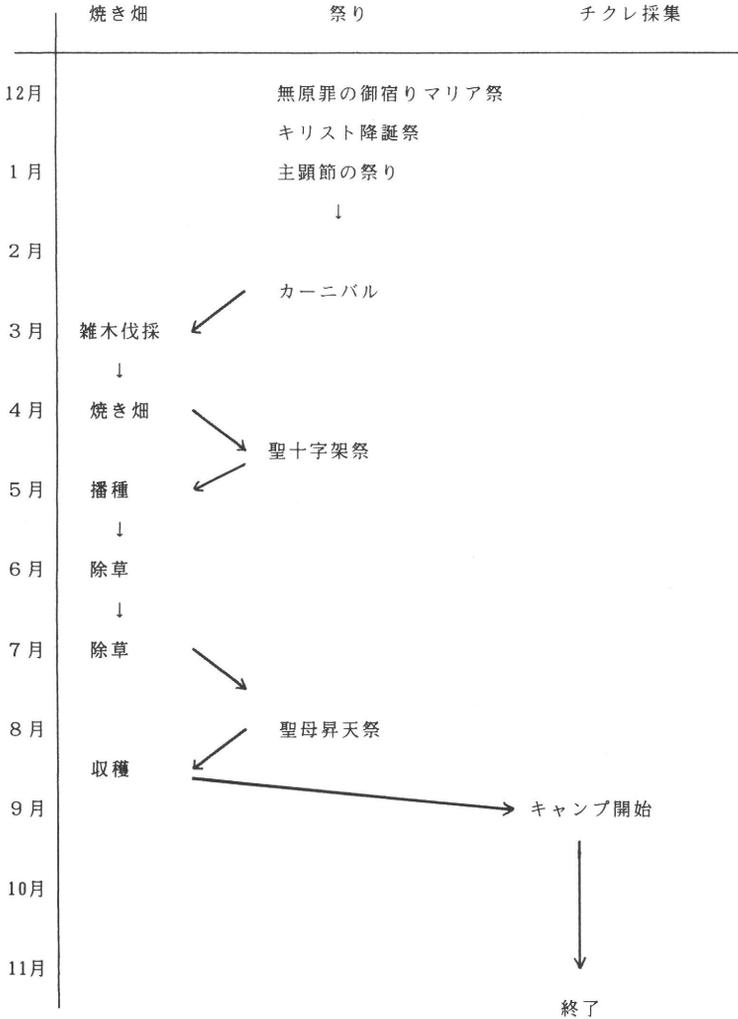
しかしながら、国家の思惑とは別に、チクレ採集産業を受け入れていったクルソブ側の声にも耳を傾ける必要があるだろう。クルソブ社会が、チクレの採集を比較的無理なく受け入れていく理由のひとつは、あきらかにチクレを噛むという習慣がもともとマヤの伝統であることである。そして、もうひとつの理由はこの地域のマヤの人びとの生活サイクルと深くかかわっていると思われる。

チクレの採集は、10～20人のチクレ採集人(chiclero)がチコ・サポテのある森でキャンプをはっておこなう。採集の作業は、まずチコ・サポテの木にのぼり、樹皮に切り込みを入れることから始まる。山刀(マチェテ)を用いてY字型に木の上からいくつもの切り込みを入れていき、その溝をつたって樹液(チクレ)が木の下に据えられた皮袋にたまるようにする。そして、たまったチクレはキャンプに運ばれ、大きな鍋で加熱し、水分を蒸発させ、水飴状にする。そして、塊にしたチクレを天日で乾燥させて、完成である。

ところで、チクレの採集時期は、7月から翌年の1月までであるが、もっともよいのは11月以降である。ここに、クルソブの土地におけるチクレ産業普及のもうひとつの理由があると思われる。つまり、マヤの人びとにとってたんなる食料以上の意味をもつトウモロコシの栽培の時期とチクレの採集時期はちょうど裏表の関係にある。チクレ・シーズンが終了する2月以降にトウモロコシの焼き畑の準備が始まるのは、先にみたとおりである。そして、ミルパの一連の作業と祭りを終えた9月以降に、チクレの森にむかえばよいことになる。いわばトウモロコシ栽培も祭りもオフの時期に、うまくチクレのシーズンがはまっているといえる。これらを整理すると、図12のとおりとなる。

伝統的な共同体社会に資本が侵入してくるとき、共同体を破壊すること

図12 年間生活サイクル



なく、共同体との接合に依拠しつつ発展する場合があるという、いわば資本を受け入れる共同体側の論理もしくは主体性を強調することは、歴史の客体として、あるいは被搾取者や敗者として受け身で描かれることの多いインディオの歴史を、正当に評価しなおすという意図をもつものである。ここで、フェリペ・カリリョ・プエルト周辺のマヤ系のインディオは、チクレ産業といういわば米国の戦略産業(ガムはベトナム戦争でも活躍した)を、自分たちの生産や祭りのサイクルにさしさわりが無いから受け入れてやったのだ、というのは極論であるにしても、生活サイクル(とりわけ農耕サイクル)との合致がこの地域で比較的抵抗なくチクレ産業が受け入れられたひとつの要因である可能性は十分にある。

むすびにかえて

フェリペ・カリリョ・プエルト古文書館において入手した祭礼許可書をおもな資料としつつ、カスタ戦争の反乱インディオの末裔にあたるクルソブ集団を含む同地域のマヤ系の人びとのトウモロコシの焼き畑栽培と祭りを中心とする生活サイクルを探り、最後にチクレ採集との関連について考察した。その結果、トウモロコシの焼き畑栽培と祭りそしてチクレ採集が、年間の生活サイクルにうまくおさまっていることがわかった。ただし、ここでいう生活サイクルは、トウモロコシの焼き畑栽培(生産サイクル)と一連の祭り(儀礼サイクル)を一括してマヤの伝統的生活サイクルとして、チクレ採集時期との裏表の関係を指摘するという形をとっている。したがって、焼き畑という伝統的生産システムに資本主義的生産システムを組み込んでいくプロセスと、祭礼システムの維持もしくは変容のプロセスとを区別した分析にはなっていない。このあたりを明確にしていくには、基本的にカトリックの祭事暦にもとづきながらもマヤの農耕儀礼的側面を合わせもつ可能性のある祭りの性格を分析していく作業をはじめ、生産システムと祭礼システムとの関係性にまで踏み込んだ研究が必要とされるであろう。

またトウモロコシの焼き畑の作業手順やチクレ採集の時期についても、聞き取り調査と文献に依拠しているもので、1年間にわたる生活サイクルを参与観察法によって調査したわけではないという制約はいなめない。しかしながら祭りについては、参与観察法や聞き取り調査では期間としても地域的にもこれほど広範囲にわたる資料の入手は不可能であったと考えられる。筆者は、エスノヒストリー研究の方法のひとつとして、聞き取り調査の有効性を認識しているつもりであるが、今回は逆に歴史学の基本的方法である古文書館における文献調査に依拠することになった。

その他多くの課題が残されている。メキシコあるいはキンタナロー州におけるチクレ産業の発展については、スペースの都合ということもあり、ほとんど触れることができなかった。また、80年代以降は、ガムの原料として天然チクレにかわって合成チクレが一般化してきたこと、またマリファナなどがガムの消費にマイナスの影響を与えていることから、チクレの需要が落ち込み、キンタナロー州におけるチクレ産業は衰退してきている。それにかわって、カンクンに代表されるカリブ海リゾートの開発にともなう土木作業員としての出稼ぎという新たな状況も生まれている。また、この地域におけるプロテスタント伝道も広がっており、プロテスタントの禁酒の習慣は農村におけるアルコール中毒問題改善には貢献しているが、祭りの費用をビールの売り上げに依存するシステムとは対立する。実際、プロテスタントと村側の小さなトラブルは現地をよく耳にした。さらに、NAFTA（北米自由貿易協定）路線に沿う形で1991年に決定された農業再編を目的とするエヒード制度解体は、すぐに影響はあらわれないとしても、クルソプ集団にとって大きな状況の変化である。今も、村側と外部世界とのせめぎあいは静かにつづいており、予断は許されない。今後もクルソプ集団の対応を追いつづけたい。

〔付記〕

本稿は、平成1～3年度文部省科学研究費補助金による海外学術研究『『イベリア系文化圏』における農村共同体の再編と都市の変容』にもとづいて平成1・3年7～9月に実施したメキシコにおける現地調査で入手した資料におおきく依拠している。プロジェクトに誘ってくださった研究代表者の清水透先生（獨協大学教授）に深い謝意を表したい。また、4000枚近い祭礼許可書の写しをまえに途方に暮れていた筆者に、コンピュータによるデータ処理を勧めてくださり、いちから手ほどきをしてくださった上野庄二氏にも記して謝意を表したい。

註

- 1) 清水(1987)。
- 2) 拙稿(1990)。
- 3) カスタ戦争の展開についての詳細は、拙稿(1986)参照のこと。
- 4) Villa Rojas(1945)。
- 5) 桜井三枝子「キンタナ・ロー州マヤの祝祭——シュカカル村の事例（1988年）を中心として——」（口頭発表）日本ラテンアメリカ学会第10回定期大会（1989年6月11日）。本稿作成時に未見であった桜井論文（1993）を校正作業段階で入手した。それによって、8月の大祭は「トゥルムの聖十字架祭」であることが判明したので、付け加えておく。
- 6) León(1988)。なお、同文献を提供してくださった、山本匡史氏に謝意を表したい。
- 7) 今回のデータで判明した守護聖人の祭りはつぎのようなものである。

村名	守護聖人	年	期間
X Hazil Sur	San Miguel	1980	0110～0119
Petcacab	Virgen María Dolores	1955	0113～0115
Betania	San José	1982	0320～0321
X Yatil	San Bernardino	1960	0423～0430
Andrés Quintana Roo	Santa Cruz	1979	0502～0502
Chunhuhub	Sagrado Corazón de Jesús	1954	0512～0516
San Diego	San Juan Nepomuceno	1980	0515～0516
Nohcah	San Juan Bautista	1980	0531～0531

San Silverio	Virgen Angela	1980	0629~0629
Señor	Virgen María	1979	0715~0715
Tepich	San Ebanó	1982	0731~0731
X Pichil	Virgen de Concepción	1979	0807~0815

8) たとえば、チャンカー・ベラクルス村の聖十字架祭の日程には年によって1か月程度のばらつきがみられるため、それぞれの項目の順序はかならずしも明瞭なものではない。したがってここで示した生活サイクルの図式は、おまかななものといわざるをえない。後述するように、この点は農耕サイクルと儀礼サイクルとの関係性にまで分析が及んでいない本稿の限界であり、今後の課題でもある。

9) Konrad(1987), pp.466-470.

10) Jiménez M.(1951), Reed(1971) pp.246-247.

11) この時期については、マイ将軍のもとで働いたアビラ・サパタ氏の著作に詳しい。Avila Zapata(1974).

12) エヒードは本来国のものである一定範囲の土地の利用権を国から与えられた農民の地域集団である。その土地は私有地と異なり、売買、譲渡、賃貸借、抵当の対象にならない。エヒードの土地のうち耕地はその成員であるエヒダタリオの分割地に分割されて個別に耕作される場合が多いが、その場合個々のエヒダタリオは分割地の用益権を有し、その権利は相続される。石井(1983), 11-12ページ。

参考文献

Ancona, Eligio

1889 *Historia de Yucatán desde la época más remota hasta nuestros días*. Tomo 4, reimprenta 1978. Mérida: Ediciones de la Universidad de Yucatán.

Avila Zapata, Felipe Nery

1974 *El General May, último jefe de las tribus mayas*. Mérida: Ediciones del Gobierno de Estado de Yucatán.

Bartolomé, Miguel Alberto y Barabas, Alicia Mabel

1981 *La resistencia maya: relaciones interétnicas en el oriente de la península de Yucatán*. México: Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Beteta, Ramón

1940 *Tierra de chicle*. México: Editorial México Nuevo.

Bricker, Victoria Reiflet

- 1981 *The Indian Christ, The Indian King: the Historical Substrate of Maya Myth and Ritual*. Austin: University of Texas Press.

Burns, Allen F.

- 1977 "The Caste War on the 1970's: Present-Day Accounts from Village Quintana Roo". Grant D. Jones, ed., *Anthropology and History in Yucatan*. Austin: University of Texas Press.

Careaga Viliesid, Lorena

- 1981 "Chan Santa Cruz: historia de una comunidad cimarrona de Quintana Roo". Tesis de Licenciatura, México: Universidad Iberoamericana.

César Dachary, Alfredo y Arnaiz Burne, Stella M.

- 1984 *Estudios socioeconómicos preliminares de Quintana Roo: el territorio y la población* (1902-1983). Puerto Morelos: Centro de Investigaciones de Quintana Roo.

Dumond, Donaldo

- 1977 "Independent Maya of the Late Nineteenth Century: Chiefdoms and Power Politics". Grant Jones, ed., *Anthropology and History in Yucatan*. Austin: University of Texas Press.

Durán, Jorge González

- 1974 *La rebelión de los mayas y el Q. Roo chiclero*. México: Editorial Dosis.
- 1978 *Los rebeldes de Chan Santa Cruz*. Mérida: Edición del Ayuntamiento de Felipe Carrillo Puerto.

González Navarro, Moisés

- 1970 *Raza y tierra: la guerra de castas y el henequén*. México: El Colegio de México.

初谷讓次

- 1986 「ユカタン・カスタ戦争（1847～53年）におけるインディオの主体性について」（『ラテンアメリカ研究年報』第6号）
- 1990 「キンタナ・ロー州マヤ系インディオの民族史的考察」（『天理大学学報』第42巻第1号）

Iglesia Nacional Presbiteriana de México

- 1973 *Centenario: Iglesia Presbiteriana de México*. México.

Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática

- 1991 *Quintana Roo: XI Censo General de Población y Vivienda, 1990*. 2 tomos. México.

石井 章

- 1983 「メキシコの農地改革と農業構造——エヒードとネオ・ラティフンデ
ィオを中心に——」(『ラテンアメリカの土地制度と農業構造』アジア
経済研究所)

Jiménez M., Luis G.

- 1951 *El chicle: su explotación forestal e industrial*. México: Editorial Gto.
- Coah.

Konrad, Herman W.

- 1987 “Capitalismo y trabajo en los bosques de las tierras bajas
tropicales mexicanas: el caso de la industria del chicle” . *Historia
Mexicana*. Vol. XXXVI, Número 3. México: El Colegio de México.

Lapointe, Marie

- 1983 *Los Mayas Rebeldes de Yucatán*. Zamora: El Colegio de Mi-
choacán.

León, Imelda de (Coordinadora de investigación).

- 1988 *Calendario de Fiestas Populares*. México: SEP.

Menéndez, Gabriel Antonio

- 1936 *Quintana Roo, Album Monográfico*. reimprenta 1979. Chetumal:
Fondo de Fomento Editorial del Gobierno de Quintana Roo.

Reed, Nelson

- 1971 *La guerra de castas de Yucatán*. México: Ediciones Era.

Reina, Leticia

- 1980 *Las rebeliones campesinas en México(1819-1906)*. México: Siglo
Veintiuno Editores.

桜井三枝子

- 1993 「ユカタン半島南東部マヤの祝祭に関する一考察——トゥルムの聖十
字架祭の事例より——」(『教養部紀要』第11号, 大阪経済大学)

Sullivan, Paul

- 1991 *Unfinished Conversations: Maya and Foreigners between Two
Wars*. Berkeley: University of California Press.

清水 透

- 1987 「コーヒー・プランテーションとインディオ共同体——メキシコ・チ
アパス高地の労働力移動——」(『人的移動にともなう都市および農村
の変容』東京外国語大学海外事情研究所)

- 1988 『エル・チチヨンの怒り』東京大学出版会

Villa Rojas, Alfonso

- 1945 *The Maya of East Central Quintana Roo*. Washington: Carnegie

Institution of Washigton.

吉田栄人

- 1987 「ユカタンにおける現代グレミオとその儀礼」(『ラテンアメリカ研究年報』第7号)
- 1990 「カルゴの循環と停滞——カルゴ・システム研究への非階層の視点——」(『民族学研究』55巻2号)